

百羅俳文集『さりつ文集』

——手銭記念館所蔵俳諧資料（九）——

伊藤善隆

（立正大学）

摘要

出雲市大社町の手銭記念館に伝来する俳諧資料の中から、広瀬百羅の俳文集『さりつ文集』（写本、寛政元年奥）を翻刻紹介する。本書は、大社の俳壇に重要な足跡を残した百羅の俳文集として貴重なものである。

キーワード・俳諧 俳文 百羅 大社 手銭記念館

はじめに

本稿では、広瀬百羅（享保十八年？～享和三年）の俳文集『さりつ文集』を翻刻する。なお、この書名は、百羅の別号である「蓑笠翁」に因んだものと考えられる。

百羅は出雲大社の社家（千家家の代官役）広瀬氏の生まれで、その母は手銭家の二代目当主である茂助長定の娘である。大磯義雄『岡崎日記と研究』（未刊国文資料刊行会、昭和五十年十月）で紹介されたとおり、百羅は、宝暦八年七月から約四か月間、京都の岡崎にいた去

来の甥（大磯氏は、庶子ではなかったかと推測している）の空阿という人物の許に四ヶ月通って教えを請い、伝書を授けられた。その後、帰国してからは、大社俳壇の指導者の役割を果たした。

なお、昭和三十七年十一月三日から五日にかけて、大社町公民館で「広瀬百羅顕彰展」（大社町教育委員会主催）が開催され、その際に『広瀬百羅略伝』に拠れば、百羅は十九歳の時に上京し、神学、漢学、歌学などを学んだ。在京中には宋屋、竿秋、嘯山、移竹、蝶夢などと交わり、あるいは貞徳や貞室、鬼貫、言水等の系統の俳人たちとも遊び、さらには美濃派に学んだこともあったが、結局は芭蕉のみを宗とすべきで

あると覚知し、以後その不易の体を専らに学んだという。

以上の経歴を見ると、百羅は中興期俳人らしい特色を備えた人物である。すなわち、中興期俳人たちの特色としては、芭蕉復帰を唱えたこと、一派一系の俳系に縛られず各自が自由に活動して個性を伸張させたこと、行脚によって交遊を広げたこと、優れた俳論を展開させたこと、同時代に流行した文人趣味の影響で古典や漢詩などの教養を重んじたこと、等々が指摘されている。百羅は、京都に出て神学、漢学、歌学などの学問を修め、諸派の俳人たちと交流し、その結果、俳諧に独自の価値観を持ち、芭蕉を尊重するに至った。そして、『秘俳諧初重伝』(手錢記念館に巻一のみ現存)や『蕉門誹諧大意 ふもとの塵』(安永六年二月奥、手錢記念館蔵)などの俳論を残している。こうした点に注目すれば、百羅は典型的な中興期俳人の一人として位置づけられるべき存在であると言えるだろう。

なお、「略伝」に拠れば、百羅には、神書、歌書、誹書、雑書などの著述が数百卷あったが、それを書店に鬻いで活計の便りとするのではなく、書蔵に秘め置いて他見を許さなかったという。そのためか、百羅の著作はほとんど現存が確認できていない。すなわち、手錢家に残されていた本書は、今後の研究の進展のためにも大変貴重な存在なのである。

〈書誌〉

書型……写本。中本一冊。楮紙。袋綴じ。

表紙……薄縹色布目表紙。縦一八・六cm×横一二・五cm。

題簽……「類題発句集(欠損)」とある刷題簽(双辺)が左肩に貼つてあるが、これは本書に流用された表紙の元々の題簽

が残ったもの。

内題……「さりつ文集」。

写式……無辺無界。每半葉十行内外。

字高……一七・〇cm(第一丁四行目「昨夜の(更に)」を計測)。

奥書……「寛政元/西中秋/硯季」。

丁数……全三一丁(含遊紙)、墨付二八丁。

〈凡例〉

翻刻にあたり、句読点、濁点を適宜補い、改行も適宜改めた。

概ね通行の字体を用いたが、一部に原本の字体を残した。

原本の片仮名や合字は、適宜平仮名に改めた。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「マ」をつけ、()内にその丁付および表・裏(オ・ウ)を示した。

誤記と思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍らに「マ」を付した。

難読の箇所は□で示した。虫損により判読が困難な箇所には、その傍らに「(虫損)」と付した。

参考のため、原本の一部を図版で末尾に示した。

〈翻刻〉

類題発句集

┌ (表紙)

└ (遊才紙)

└ (遊ウ紙)

さりつ文集

八月十五夜月にむかひてひとり感慨の思ひを述る辞

昨夜の秋雨なをはれやらす。こよひの晴陰、更にしりがたしといへども、やまと、もろこし、月をもてあそべる、尤此時をもて佳辰とす。明年(来)なをありといふとも、今秋は又ふたゝび来らず。よしや雲雨の愁ありとも、などいたづらにねてあかすべけんや。されば同調の風客二三子につけて、良夜の佳会をなさんがために、みづから囊中(一)の阿堵をつくし、素鷺川の清泉をもてかもしける甘露一滴をこひ来りて、昔の根の長き夜すがら、ともに吟嘯すべけんには、猶さかなもとむとて、こよろぎのいそぎありきつ、柴のあみ戸さしやらすして、夜たゝ客の来るをまつに、月は倚牛に至りて晴光たぐひなしといへども、さらに□(出)する人なし。ひとり月下の醉客となりて、みだりに五首の氷懷を述ることしかり。

安永四のとし

五首の哥は略しぬ

倚牛

「(ウ)

風水翁の靈廟に詣て手向奉りける辞

今はむかし、風水翁と聞へけるは、八雲たつ出雲の国日御碕の神職日置氏のおほちにして、いにしえ元禄宝永のころほひならん、あまねく天下に名をしられて、風徳よもに隣ありける人なり。ことに此国のみこともちのめぐみふかくて、あづまの都に「(ニ)」つかふまつりけるもや、としあり。かるがゆへに神道は一樹ツツ靈神よりつたはりて、橘家一流の奥玄をさはめ、和哥を詠じ、連哥に遊び、又柳水翁の門に入て誹諧談笑をこのみしより、其角、嵐雪には金石の交りをなし、活徳(マ)、立

志等には鷗鷺の盟をむす(マ)てより、風雅の佳名、世にますく、高かりし。

しかのみならず、はいかひ三十六仙にもいりて、近江の国坂本の広前に千載不朽の英名を残されける。身は元日のもち袋、といへるは、一世一句の絶章とかや。又奥羽一見の時

松嶋やいらぬかすみの立て来る

「(ウ)

此外、玉藻あまたなる中にも

七夕の硯はかりておきの海

夕ぐれの小男に角のあるもの歟

と例の俗言を吐捨給ひし。ひなの翁のひなぶりながらも、義は神明に慣へるにや、七十有余星霜をふれども、玉唾なを人口に残れるをや。廟は五十田狭小汀にとなる熊成のふもとの海岸にのぞみて、さらに丈余の岩壁あり。みづから彦雄靈神の四字を刻て終に其下に神去給ひぬ。廟前の風光も亦ことに美景にして、春は花とりの色音をたづねて、蕨、虎杖(ニ)の家づとも、とほしからず。夏はほと、ぎすをまつたよりよろしく、海士の火かげはさながら、山松の梢につらなり、紅葉ふみわけなく鹿の声がするなる夕ぐれの気しき、秋はまたなくあはれふかし。先南をのぞめば、名におふ石見潟は波に匍匐し、かたみの山は雲に峙て、雪のあしたの佛は、あたかも土峯にむかへるがごとし。又西にむかへば、蒼海渺々として、こまもろこしも遠からずや。釣の小舟は雲を凌ぎて春水天上に座すと興ぜしも、雲井にまがふ沖津波とよみしも、唯一里のうちに思ひ多々たり。絶海清閑の地なるには、古人のこゝろを「(三)」とゞめしも、むべなる哉。ことし安永よつの春、花の時花をもてまつるといへるふることと思ひ出で、此靈廟に一枝をさ、げ、ひとり懐旧の涙をはらひつゝ、みだりに不文を述て、古翁のあとをしたひ奉るといふことしかり。

哥は略す

如月中旬 七猿齊春信

「(オ四)
「(ウ四)

猿の画讃

神世のむかし、猿の翁とていとも大なる山猿あり。口尻ともに赤うして、口のひかりにはあめを照し、尻の光にはつちをてらす。眼は八咫の鏡に似たる、是を猿眼のはじめとせり。其目にもろくの悪色を見ず、其口にもろくの悪語をいはず、其耳にもろくの悪声をさかすして、ある時は見ざるとなり、ある時はいは猿となり、又ある時はきか猿となりて、人を導き教へたる、其徳の大なる事、さらに宇宙に比するものなからん。されば此猿の弟子となりて千世のふる」(オ五) 道を学ぶものは、人にまさるの翁なれども、直なる木を飛そこなひて、曲れる枝にすべりおちたるは、世に猿智恵のうき名をとりて、狙公がもとの椽の実に、朝四暮三のよろこびをなす。あゝ、くらい哉

みの笠翁たはぶれ^(山)□かく

哥 三輪の山すぎしむかしはなれだにも

よみけるものを大和ことの葉

発句 柴の戸は猿の外なし月の友

「(ウ五)
「(オ六)
「(ウ六)

案山子画賛

あるとしの秋、あづまよりのかへるさに、木曾の山路をたどりゆくほどに、日すでにたそがれなんくとす。坂を下れば、道のあなたに人あり。宿かしてよとよばふれどもこたへず。おりしも風のはげしければ、松ふく音にまぎれてや、聞かざりけんと、畦のほそ道を伝ひ行て、

またしかく此ことをいへど、なをさらにうけがはねば、もしは耳と^(虫)き老ほれにや。そばちかふよりてみれば、笠は破れて雨にそぼち、蓑はちぎれて風にみだれ」(オ七) つゝ、篠の弓矢のはりもなければ、交り^(虫)をたえあそびをやめて、今はうき世にあきはてたる我や、いましに似たるらん。いましやわれに似たるらん。心なければいざしらず

行秋や道連ほしき木曾の旅

「(ウ七)
「(オ八)

蛸庵記

岩間のおくの山居にはあらねど、爰の市路の傍に、むかしある人の世をしのびてむすび捨たる草の戸あり。唯露の身ををければとて、いとことそぎにつくりなして、あるじのほかは膝を^(虫)いるゝにたらず。まして月雪のひかりもうとければ、壁をうがちて風窓をひらき、あらたに是を蛸と名づけてふたゝびのがれすむ人は月読の里にあり。侘たる我友、山もとの」(ウ八) 老雅になん。されどひとりも淋し過たれば、うき世いとわん友もがなとて、賤の翁もまねきにあひぬれば、草居露宿をともにして、くやくしく過しいにしへをかたりあへるに、閑子は常に囲棋を好み、われは常に和哥を好む。其好む所ことなれども、同仁相憂^(ウ)□の心ふかければ、日頃水魚の交りをなして、信を通ること五十年、子は欄柯に日を暮し、われは花鳥に日をくらせり。そも蛸をもて」(オ九) 名とする心は、蛸は寒蟬也。其声嘒々たる時は、うそ寒しとかや。今ともに老衰して秋風をかなしむ事、渠にひとしかれば、必たそがれに至りて鳴寄合しも、既に落日にちかし。あすをもしらぬ病翁ふたり、さながら秋蟬の苦吟するにひとしければ、こもまたまぼろしのすみかならずやと、かひまさぐりてかひやりぬ。

寛政六のとし

「(ウ九)

日ぐらしや鳴て間もなき柴の庵

「(廿)
」(廿一)

倬魚坊辭

昔蕉門に十弟あり。をのく赤角の才にして、世に是を十哲と称するにや。しかはあれど祖師は丁因なる翁にて、かゝる過当を好める人にあらず。蓋僊化の後に至りて門弟好事の輩の彼仏門の十大に比し、あるは孔門の十哲に習ひて、ひそかに人を撰みたるにこそあらめ。一門の正風も面々の意気にわかれて、渠は死鼠をもて玉璞となし、是は山雞をもて鳳凰となす。さるが中にも、美のの支考はひとり文筆の英才にして、ほと、「(廿三)平地に波を起せり。其一流四辺にみちて、是に染習するもの、あたかも泉のごとくに湧といへども、実に誹諧の蘊奥をしれるものは、今の世にはいとまれなるが中に、奥に魚坊浄愚といへる騒客は、もとは石見の産にして、父は中嶋芙三とかや。此人獅子門なりしかば、孝子も共に此風に執心して、窓に螢雪をあつむる事、既に五十年のいさをしならん。かくて文章に自在して言句に人をおどろかし、かつは談笑に和らぎたる滑稽の辨人にて、高く佳名を夷洛にしられ、いつし」(廿二)か門人のまねきにあひて、当国坂田に居を移せり。されど風雲の情やむ時なく、常に山野を家とせし経回多年のつかれにやありけん、あし引のやまひがちなれば、今は幽栖にかきこもりて、老をやしなはんがためにとて、今市の里に茶廬をむすびて、みづからはをしのぶ庵と名づけ、忍びかくれてしづかならんとすれども、友遠方よりむれ来りて、閑居一日もしづかならねども、もとより此路をば行」(廿三)尽して、今は行つきかたもなしとにや。故翁もはじめは拾穂門に百人一首の秘説をさづかり、源氏は湖月に眼をさらして、もはら哥学をもつとめ給へば、今や晩学なりといへども、あしたに道

を聞てゆふべにしなんことは学者の心、此外ならずとしきりに和哥の修行地をおもひたてり。其道に信実なるや、其わざに秀才なるや、ふかくおしむべき信友なるがごとし。寛政五とせの冬、七十になんくとして終に黄泉の客とはなれり。琴も無弦に至りては」(廿三)聴者稀なり。古今唯一鐘期のみ。老今連れなく、我を捨てゆく。吁、かなしい哉

今からは誰にか見せん冬の梅

「(廿四)
」(廿四)

甲^二魚坊、一周忌辭^一

むかしの翁のあとをしたひて、ある日は爰の花にわらひ、ある夜はかしこの月になしむ同調の風騒みたり。中にも老僧とたのみけるは、古年の冬霜月のけふにはありけん、茶の花の一句に此世を捨て、よみの山路の雪みにとて行かれけるは、芭蕉尊者のもとを尋てすきの風談に」(廿五)月日を送り、遂に帰路をや忘れ侍られけん。あとの中庵に空々として明くれたよりをまつものは、唯又閑坊とわれとのみ

櫓の火やいつまでふたり庵の留主

「(廿五)
」(廿五)

富士の紀行

若かりし時は、旅をすきて都のかたにはいくぞ度となく行かよひて、西は松浦がた、東は鳴見潟までさまよひけるも、よそぢ近きころよりいたつきおほかる身となりて、蓑も笠もほかしけれど、東海道の一すぢをも見ざらんはと、先師の申されしも心にくかり。かつはあめつちの内にたぐひなしといへる富士をみずしてしなんことはいとくちおしと、老の」(廿六)坂近きまでも思ひやまず。よしや、いづくも旅の世なればと、例の無常迅速に草鞋引しめ、笠うちかぶりて千間の関山を

こへ行に、日すでにたそがれになんく^{とす}

身がるさに手のまたく^るほたるかな

是よりはりま路まではさらにめとまるかた^{山相}なければ、あやしき竹の輿にうちのりて、わきめもふらで、いそがしけるほどに、ねむりさめて見れば、あかしの浦なり。はかなき夢を夏の^{つた}月といへる先師の一句を思ひ出て

蛸壺の夢の間涼し磯まくら

又、浜辺を行に見渡し近き浦ながら

山よりもあゆみくるしきあつさ哉

梅が碕といふ所は、つの国のさかひにて、是より須戸の浦とかや。かたつぶり角ふりわけよと興じられし先師の句には及びなけれど

這わたる鳶やもと^{うら}須戸あかし

何くれとして行暮たれば、海人の家に宿かりて、か^の見わたせば、ながむれば、見ればといへるも感に堪て

見わたしてながめかねたり秋の暮

此あたりはむかし軍せしあとなれば、みる物きくもの、みなかなし

かはる世や案山子の弓に響むし

生田河いく度も秋の水寒し

昆陽の里にかりねして芦の葉のそよくに目もあはねば^{山相}

秋の声夢見るひまもなかりけり

京にてしる人のかたに五日ばかりとどまりて、ふ月のすへに思ひたちて、あづまにくだる。先とて木曾寺に参りて先師の墓を拜み、草堂のかたはらにしばらく休らひて、つくづく思ひめぐらすに、世に誹諧とさへいへば、いづくもおなじ事と思へど、此翁の教へけるは、和哥の道の^{つた}正風体とて、まったく古今集より出たる正雅なるに、その

弟子どもに至りては、ことごとく変風しておかしからず。今の世人、ことにいひちらすは、皆世わたりのたづきにして、初学の耳をへつらへるものなり。和哥はおほやけの道なれども、変風にうつりし事度々ありて、あるは為兼卿の異風におちたるを、頓阿法師の正風にかへられしごとく、翁ひとたび古風をあらためて、当流をしめされたれども、終には世の人の正風^{つた}を忘れて又あらぬさまにうつりかはれり。しかあれど、此道は唯千載の後までも、翁を師としてつとむべきにこそと思ひて

芭蕉より外に広葉はなかりけり

さてゆく^く湖上を見わたせば、比良、三上、鏡山、唐崎の松もおほるにて、かの花よりもの曲節にすべて心腑に銘したれば、みづからの句はなくて、唯是をのみあまた度感吟するに、伴へる人の^{つた}いひけらく、此鷺の橋とはいかなる事にや。鷺のつらなりてゆくを、唯橋のやうに見立られしにや、と尋ぬ。予答て曰、句、一曲一わたりはそれにもよし。されど鷺のつらなりて行を橋とはいふべからず。是を見立て、ゆへもなきにみだりに作するは正風にあらず。此句きはめて妙所あらん。うかつにいふべからず。

鏡山 我顔も日に黒ぬしの哥のさま

鈴鹿 虫の音もまじるや馬の鈴鹿山

熱田 秋もまだあつたの森の下涼み

小夜 よくきけば石にはあらず虫の声

あめのもちといふ峠にやすみて

菊の日も近し山路の餅買ん

翁のまねして此道をたどりゆくに、大井河にて

われによく似たり井関の山がらす

うつの山　こき入て袖からもちる蔦紅葉

富士川　富士河や氷らぬばかり秋の水

白酒　酒しろしさぞ富士川の雪の水

原といふ所にとまりける夜、はじめて夜寒をおぼへて

身にしめてねばや夜寒も富士おろし

三嶋にとまる日は雨ふりて、ひめもす富士を見ず。されば先師の霧時

雨の句もかゝるおりにやと

霧時雨見ぬ日ぞ富士のはなし哉

今朝は雨はれて空よくすめり。目にかゝる」(三十一) 時やことさら、と

いはれしは、いと感ふかけれど、今は葉月のころなれば、秋の空なる、

といひし鬼貫が句も亦おかし

朝寒に帯せぬ富士のすがたかな

伴へる人にかたれば、是は正風にはあるべからず。帯は人にこそ、姿も

亦人にこそ、と難ず。予が曰、我とし古き下手なれども、翁の正風にま

なことをさらす事、今すでに四十余年、かつてゆへなき事をいはず。詩

哥の」(三十二)例を本として、風曲をつくす事は、是先師がたましひなり。

白雲帯に似たるとは、詩の風曲にして、古備の中山帯にするとは和哥

の風曲なり。山の姿にかゝるしら雲とよめる家隆の秀逸をばしり給は

ずやと、道すがらいひしことを旅宿のつれづれにかひつけぬ。」(三十三)

」(三十四)

」(三十五)

」(三十六)

」(三十七)

」(三十八)

」(三十九)

俳諧ノ歳

古元禄の頃にかありけん、何がしの翁といへるがしばらく生涯のはかり事となせしひな哥の道といふは、儒にあらず、仏にあらず、世に浦安の国ぶりなれば、神道をもて父となし、哥道をもて母となして、正

風一家をおこされしに、その門人に至りては終にはもとの心をうしな

ひ、二千余歳のむかしに名ありて」(三十四) 周秦より諷諫にしられ、漢

魏に談笑を広めしとて、史記漢書の類を引證せし白馬経といへるを偽

作して、言篇に書たるは歩皆切にあらずとて、みだりに人篇に書あら

ため、俳俳の二字に新古をわかち、哥書に言篇をか、れしは貫之あそ

みの誤なりと哥道の故実を破り捨て、あらたに唐の俳諧を」(三十五)と

り出し、和哥連哥に敵したる枉言を広めしは、またく此道の異端也。

すでに猿蓑をはじめとして、在世の撰集すべて言篇なるを、滅後には

をあらためよといへる事、蕉門の高弟すら其説を聞たる人かつてなし。

唯、何がし法師ひとりのみ。三十年も活残りて姦計に世を惑はし、才

辨に人を誣つけて、あとは野となれ山となれ、をのが一世の活計にさ

へなればと、先師の本意を」(三十六) 乱したるは、是此道の楊墨にして、

其句調の姪けたる事、すなはち亡国の音に近。さらば、わが門に遊

べる人、今も翁の風徳をしたふとならば、長く日の本の俳諧をたのし

むべし。必唐の俳諧には遊ぶべからず

」(三十七)

」(三十八)

」(三十九)

」(四十)

」(四十一)

」(四十二)

」(四十三)

」(四十四)

」(四十五)

」(四十六)

月見席詞

花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれみ、露をかなしめるたぐひ、四時の美景すべてよろしきが中にも、唯月をもて最上とす。春夜の朦朧たる、夏の清涼なる、晩秋の冷影、雪中の寒光にいたるまで、古今愛せずといふことなし。殊に三秋はすぐれたるが中に、わきて中秋十五夜をもて、是をもてあそぶの佳辰とす。しかりといへども、狂雲のために晴明をねたまれ、寒雨のために良夜をうしなひて、むなしく蓬」(四十七) 窓を戸さす風騒のうらみ、歳々にふかし。さるを、今宵秋

風高く吹て雲霧一時に散じ、山海万里の望を隔ざるがゆへに、しきりに吟嘯の情を発し、おもふどちいざなひて、つゝに養命山院に至りぬ。山鳥の尾の長き夜をさへ、をじかの角のつかの間に思ひなして、みだりに卑懐を述ることしかり

めづる身はふりゆく秋に月こよひ又あたらしきひかりそひぬる

〔(六十)〕

〔(六十一)〕

歳暮の述懐

世の外のすみかは、常にだに、とひ来る人もまれ／＼なるに、わきてきのふけふは、くれ行年のいそぎにか、づらひぬるにや、ふつに音づる、人もなかりければ、いと物しづかなる寒燈のもとに、ひとりつら／＼おもへらく、やまと哥の道は日のもとの本理正道なれば、此国に生れ来れる人は、たかきもいやしきも、おのこもをうなも、なべてつとめおこなふべき道なれることは、世々の聖賢のさる(軒)が中にも、八雲たつ出雲の國のすがのさとは、わきて此道の起源なれば、此さとにすめらん人々は、殊に此道をもはらにすべきことと、我師転幽老翁のふかくしめしたまへることのこゝろにそみて、いやしきやつがれまでも道に入し日より、朝露のひるまにも忘れず、夕波のよる／＼もおきゐつ、つねに嗟嘆し、詠哥するといへども、もとより才つたなく、こゝろみじかければ、いまだ桂林の一枝をもよぢず。かつて崑山の片玉をもひろはずといへる古賢(軒)の詞のおもむきを歎くがあまりに、述懐一首の俚語をつゞりて、おなじ道の友どちのもとにをくり侍ることしかり

老てこそゆきもつくさめことの葉のみちのためには年もおしまし道しらぬ我身はいつと八雲山ふもとのさとにたちまよひつ、

春信 〔(八十)〕

〔(八十一)〕

〔(八十二)〕

〔(八十三)〕

〔(八十四)〕

〔(八十五)〕

寛政元

酉中秋

硯季(マ)

〔(見裏紙)〕

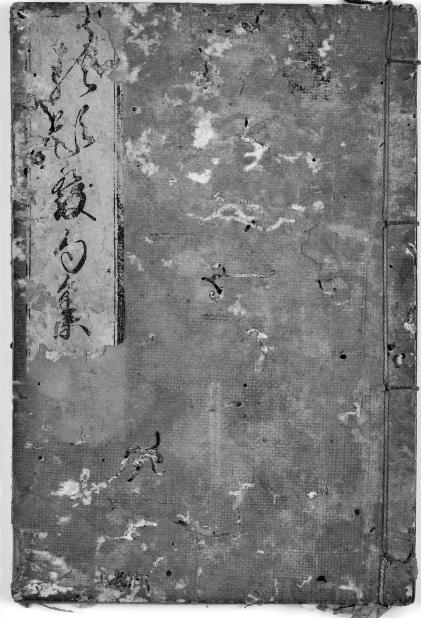
付記

本稿をなすにあたり、手錢家の皆様には特段のお世話に与りました。また、手錢記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

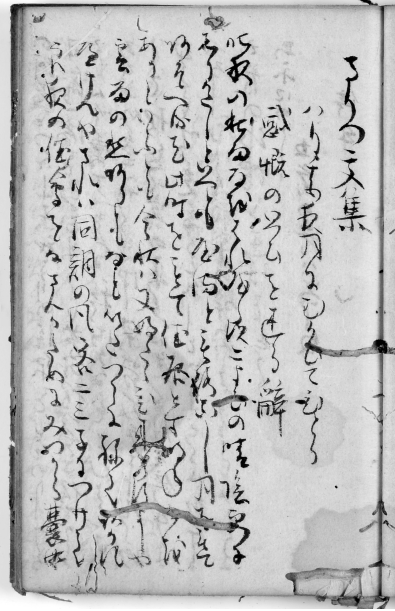
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」(二〇一六―二〇一八年度、代表・野本瑠美)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「人を結びつける文化」としての俳諧研究」(研究課題番号二六三三〇二五九、代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

〈参考図版〉

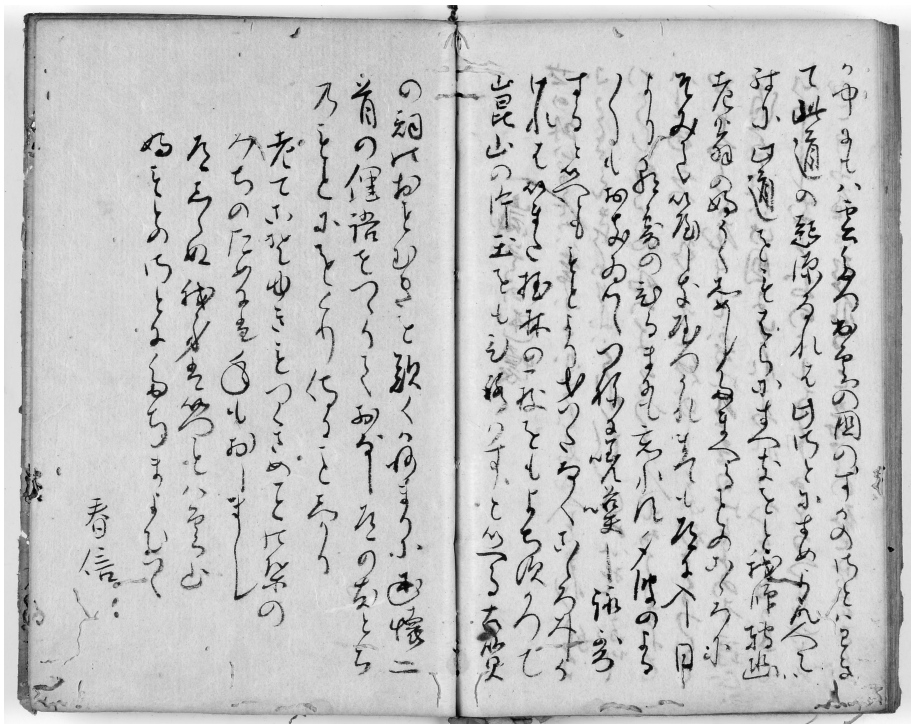
1. 表紙



2. 巻頭

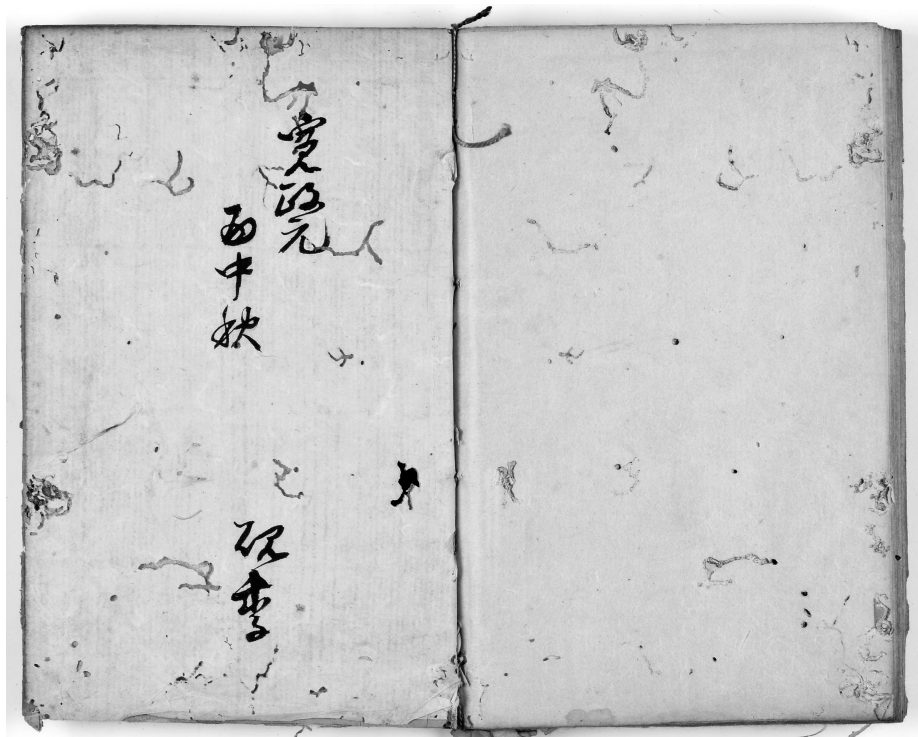


3. 巻末



4. 奥書

百羅俳文集『さりつ文集』—手錢記念館所蔵俳諧資料(九)—(伊藤善隆)



Byakura“*Saritsu-Bunshu*” : reprint and introduction —A study of Haikai literature in Tezen Family Archives (9)—

ITO Yoshitaka
(Rissho University)

[A b s t r a c t]

“Saritsu-Bunshu” is a collection of haibun by Byakura. Byakura was one of the most important haikai poets in Taisha area. In Taisha, haikai poets had inherited the teaching of Kyorai, which was introduced by Byakura.

Keywords : Haikai, Haibun, Byakura, Taisya, Tezen Museum